

腰おれすずめ

つぎの日、軒さきにすずめがとんできて、まどの外できれいな声で鳴きました。おばあさんが戸を開けてみると、庭いちめん、ひょうたんの種がちらばっていました。おばあさんは、その種をぜんぶひろいあつめて、裏の畑にまきました。すると、きれいな芽が出て花がさき、実がなって、大きなひょうたんがたくさんとれました。おばあさんは、よろこんで、ひょうたんをみんな軒さきの日当たりのよいところにつるしておきました。十日ほどたつと、ひとつのひょうたんから、まっ白いお米がぼろり、ぼろりと落ちてきました。

すずめが恩返しに持ってきてくれたひょうたんの種。あつという間に大きくなって実となり、白米がこぼれてきます。奇跡の贈物です。

ジャックと豆の木

おじいさんは、ポケットから、見たことのないきみょうな豆をいくつか取りだしていいました。

「おまえはなかなかりこうだから、この豆とその雌牛をとりかえてやってもいいぞ」

「なんだって。ばかばかし」と、ジャックはいいました。

「ははあ、これがどんな豆か知らんのだね。夜まいとけば、朝にはつるが空まで届いているのさ」

「ほんとう？」

「ほんとうだとも。もしそうならなかったら、雌牛は返してやるよ」

このおじいさんはいったい誰だったのか、まったく説明されていませんが、豆の靈力を考えると、彼岸からの援助者ですね。

オーバーン・メアリー

つぎの朝、やってきたのは大がらすではなくて、髪を金の輪でたばねたりっぱな若者でした。若者は、

「私が大がらすです。悪い魔法にかけられていましたが、あなたのおかげで人間にもどる

ことができました。お礼にこの包みをさしあげます」といって、かかえていた包みを王子に渡しました。「来たときと同じ道を通ってお帰りなさい。妹たちの家にひと晩ずつ泊まってね。この包みは、あなたがいちばん住んでみたいと思う場所に着くまで開けてはいけませんよ」

王子は、若者に別れをつげ、来たときと同じ道を帰っていきました。

ずいぶん歩いて暗い森までやってきました。王子は、包みが重くなってきたように思われたので、中を見てやろうと思いました。包みを開けたとたん、目の前にすばらしい宮殿と庭園と果樹園が現れました。

これも恩返しにもらった奇跡の贈物です。中には、宮殿と庭園と果樹園が入っていました。

大晦日のお客

旅人は、となりの家に行って、

「どうか、泊めてもらえndらうか」とたのみました。すると、

「まあ、きのどくに。泊めてやろう」といって、中に入れてくれました。そまつな家だったので、土間にむしろをしいて、ねかせてくれました。

夜が明けると、元旦です。

家の人は、旅人を起こそうとしました。ところが、見ると旅人は死んでいました。おどろいて、旅人の手をひよつと引っぱったら、手は、ジャラジャラツと、お金になりました。またもうかたほうの手を引っぱったら、その手も、ジャラジャラツと、お金になりました。

まあ、足をひよつと引っぱったら、またジャラジャラツとお金になります。旅人のからだ

はみんなお金になりました。

彼岸者は、死んで死体となり、さらにお金になります。これも贈物です。

みじめおばさん

おじいさんは、パンを受けとると、

「あんたは、なんてやさしい心の持ち主なんだ。おれいに、願いごとをひとつかなえてあ

げよう」といいました。おばあさんは、考えてからいいました。

「そうね。私の願いごとはただひとつ。私のナシの木にさわったものは、みんなびったり木にくっついて、私のはなしてやるまでにげられないようにしてほしいの。みんなでナシの実をぬすんでしまつて、それはひどいんですよ」

おじいさんは、

「では、望みどおりにしてあげよう」といって、どこかへ行つてしまいました。

贈物は、目に見えてさわられる実体のあるある物とは限りません。「望みをかなえる」ということも贈物です。

旅人馬

ある日のこと、七十歳ばかりの白髪のおじいさんに会いました。男の子が、

「おじいさん、おじいさん。教えていただきたいことがあります」というと、おじいさんは、

「何が知りたいんだ」とききました。

「じつは、宿屋のおかみさんがいろりの灰で米を作り、その餅を食べた私の友だちが馬になつてしまいました。どうしたら友だちをもとの人間にもどすことができるか、教えてもらえませんか」

すると、おじいさんはいいました。

「よしよし、教えてやろう。この道を行くと、一反畑に一反のなすを植えたところがある。

そのなかの、東がわに実のなつた一本から実を七つとつてきて、その馬に食わせるといい」

男の子は、

「ありがとうございます」とお礼をいって、道を進んでいきました。

おじいさんは、主人公に、友人を人間のもどす方法を教えてくださいます。これは、「言葉による贈り物」です。